最後に結論として「三國史記及び三國遺事の百濟都城陷落の際の記事に見ゆる白江は、今の錦江の一部分的稱呼たる白馬江にして、伎伐浦の別稱に非ず」と述べて居られる。尙この白江及び炭峴に關して池内博士は今年四月の東洋學報（第二十一卷第三號）に說を載せて居られるから、併せ見られん事を希望して止まない。本論最後の百濟都城扶餘及び其の地方も未定稿であつて、昭和二年五月、往復一週間を以て扶餘地方の史蹟を踏査された時の報告に外ならない。凡て五項數十目に分けて其地方の歷史地理に就いて述べられたもので、前記諸論文と併せ讀むべき詳密な研究報告である。而して此旅行は次項の旅行と共に故博士が百濟史研究に非常な興味を起されるやうになつた動機をなすものであつてみれば今日、本書の成るに至つた遠因と申して差支ない興味ある旅行の報告である。

附錄に載せられた「全羅北道西部地方旅行雜記」は昭和四年五月六月、五年六月八月九月十一月の六回に亙つて、「文敎の朝鮮」に發表されたもので、昭和三年八月初旬に於いてなされた旅行の報告に外ならない。故博士は謙遜して「茲に誌すのは其旅の雜記である。從つて研究に亙つて居ない。研究の結果は然るべき折に然るべく發表するつもりであるから、此記事の淺薄な事は御承知の上でお讀みを願ひ度い云々」と言つて居られるが、決して單なる旅行記でなく全十項とも得易からざる研究報告であり、又立派な論文である事は申す迄もないのである。殊に專門家は別として、此地方に關して知る所少い者に對し、實地に就いて種々の史料文獻により記述された事は、誠に興味ある報告と言ふを憚からない。

以上極めて無雜にして、內容に關しては勿論、外廓の紹介すらも、充分になす能得ず、却つて故博士の學德を傷つけ汚した事を懼れるのであるが、故博士御存命中發表された四篇と未發表未定稿の四篇とを合した一册の此百濟史研究は、實にこの方面の研究者の指針となるものであつて、やがて後進の士の奮起を促し以て故博士の遺志の一端なりと具現するもの、出る事を切望して止まない故を以て敢て拙文を以て紹介の辭とした次第である。嗚呼、博士永眠されて茲に滿二年、今や滿鮮史研究、再認識の聲の盛んになつた時、この良著を世るに至つた事は我學界の限りなき喜びとする所であると共に、今後引續いて故博士の遺稿の續編が出ん事を祈つて止まないのである。終りにこの良著の編纂印行に獻身的努力をされた藤田、末松、田川の三氏に謹んで感謝の意を表する次第である。（菊版、定價五圓京城近澤書店發行）

（總淵）

●東方文化學院京都研究所報告第五册

自顧愷之
至荊浩　支那山水畫史　伊勢專一郎著

本書は東晉の顧愷之より五代の荊浩に至る凡そ五百年間の山水畫史である。尤もこの時代は材料の至つて鮮ない時代なので、第一章は顧愷之の女史箴、第二章は傳李昭道金碧山水圖卷第三章は王維江山雪霽圖卷、第四章は浩荊秋山瑞靄圖が主なる

資料となつてゐる。一つの作品が其人全體を代表するのであるから、書中の荊浩とは卽ち秋山瑞靄圖の作者の別名に過ぎぬことも亦已むを得ぬことである。

思ふに顧愷之の女史箴圖の中の山水は至つて奇怪なものである。自分は或は之は山海經圖の一部分ではないかと思ふ。山海經は元來圖が先づあつて後に出來たものなることは一讀して想像される。この山景は說明と合せ考へて羿が十日を射てゐる所ではあるまいか。果して然りとすれば日の下の山や之に住む怪獸は此處では別に必要なものではないが、在來の圖にあつたので、それが偶然に入つて來たことになる。甚だしく「非現實的」な所もそんな所に一つの理由が存するのではないかと考へられる。

荊浩の秋山瑞靄圖は始めて鮮明な寫眞で見ることを得たが、素晴らしい傑作である。凡てが線の集合で出來てゐる所は西洋の密畫を想はしめるが、何か關係はないものであらうか、剛勁な線で揑れ上げて、而も乾燥に陷らない。この繪は中に時間を含んでゐる。油繪と偉人は遠方から見るに限るといふのが西洋の理想ならば、東洋の繪は飽く迄近づいて親しむ可き繪である殊に山水畫は觀る人自ら畫中に入つてその道を步み、巖あれば立停り、泉あれば掬し、芝生あれば蹲つて四方を眺む可きものである。點景の人物は、觀者が眼を休止さす可き位置である。支那の立軸は元來橫長の圖卷から來たので、橫長の圖卷が、橫へ移動する遠近法によつたと同じやうに、立軸は「重れ合せた遠近法」が生じたのであらう。この畫中の時間は極度に節約されればならない。一月一年、或は生涯かゝつて見た所を僅か一軸の中に收めればならぬから、出來上つた圖は所謂寫景ではない。卽ち現實にはどこにも存在しない景色であるが、實は現實の景色の粹である。「胸中の丘壑」とは斯んなものゝことではあるまいか。

本書を紹介する役に當つた自分は門外漢であり、この書の中にあることが非常に六ヶ敷くて、正直の所十分には了解しかねたのであつた。附錄の圖譜を見、記事を讀み乍ら生じた感想が右樣のものであつて、一向紹介にはならぬが、自分はこんな印象を受けたといふことを紹介した次第である。

中學で賴山陽の耶馬溪圖卷記や齋藤正謙の下岐蘇川記を習つて、童巨の意だとか荊關の筆だとかいふ文句に出會つたのを記憶するが、今にして思へば德川時代の大儒達は、異國の名畫に憧れ乍ら實はその眞蹟を見ることが出來なかつたのである。この書に載する所の附圖、掃圖の原本は顧愷之と李思訓とを除く外、悉く我國に現存するものゝみである。それが現時の最高の技術を傾けて鮮明な寫眞版となつて机上に提供された吾人はつくゞ聖代の有難さを感謝せざるを得ない。

支那山水畫の本領は次の宋元時代にある。近くは黃公望の山水圖卷が所有者さへ氣付かずにゐたのが發見されたといふ嘘のやうな事實もあつた吾人は刮目して本書の續きが出現するのを待つであらう。（東方文化學院京都研究所發行。本文四六版一

八〇頁。挿圖十三葉。附圖四六倍。四七葉定價金八圓)(宮崎)

◉國語索引　鈴木隆一編

讀みもせぬ本を索引で引いて調べるなどは横着だと叱る老大家もあるといふが、索引は便利なものである。考證學は清朝時代の大家の手によつて殆ど行く可き所まで行きついた觀があるそれよりも物覺えの悪い後の人が何か新しい事を試みやうとすれば、先人が蔑視して手をつけなかつた所をやるか、或は別に新しい方法を用ひればならぬ。此處に新しい方法の一つとして「索引」作成が起つたので、日本でも支那でも現今は索引時代であるかの如き觀を呈してゐる

本書もその潮流に乘じたる一つとして現れたもので、東方文化學院京都研究所に於て正史・經書等幾多索引作成事業の中、卒先して功を竣へたものである。底本には士禮居覆刻天聖明道本を用ひ正文並びに韋昭の解に就き、人名・地名を始め、天文・律曆・政治・道德・學術・教育・經濟・法制・祭祀・軍事・音樂・儀禮・器用・服食・傳說・俚諺・成語・訓詁に關する主要なる文字を標出して尋檢に便にす。排列は文字の筆劃の多少により、同劃のものは康熙字典の順序に從つてゐる。蓋し最も穩當なる方法であらう。

思ふに索引作成の事業たるや、非常なる根氣と精力を必要とするもので、一度カードに取りたる後に之を分類排列するのが一苦勞であり、最後に四六倍版にぎつしりつめられた六號活字の校正の骨折がある所謂緣の下の力持となつてこの難事業に當つた編者は深く其勞を多とさる可きである。併しお蔭で讀まないで濟む本が又一部殖えたと云つたらば益々老大家に叱られるであらう。(東方文化學院京都研究所發行。四六倍版。二七六頁。定價金武圓)(宮崎)

◉滿洲に於ける拳匪の叛亂　園田一龜著
◉庚子年中俄在東三省之衝突及其結果　楊紹震著

西紀一九〇〇年北京に勃發せる義和拳匪の叛亂は忽ちにして滿洲に波及し、拳匪は此處に於いても亦官兵と結托して排外の烽火をあげた。虎視眈々極東侵略の手を擴げんとしてゐたロシヤは好機至れりとして東三省に出兵し、全土に亘つてこれを占領した。日露戰役は端をこゝに發する。かく劃期的な意義を有するに拘らずこの問題は從來閑却されてゐた。今、園田一龜氏の「滿洲に於ける拳匪の叛亂」(滿蒙自第十五年第四號至第六號所載未完)及び楊紹震氏の「庚子年中俄在東三省之衝突及其結果」(清華學報第玖卷第一期所載)の二論文を得たるは吾人の欣快とする所である。

一、園田氏は長く滿洲に在り、清季外交史料、清光緒朝中日交涉史料、程中丞庚子函牘鈔略(庚子交涉隅錄)清史稿、拳匪紀事等の外、多年蒐集せられし滿洲各地志等の史料を以て本論文の根據とされた。遼陽(民國十七年刊)遼中・海城・蓋平・鐵嶺(民國六年刊)興京・東豐・復縣・莊河(民國十年刊)懷德(民國十八年刊)海龍(民國二年刊)通化